愛しのエリー。

Maria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しのエリー。

【コード】

N3372Y

【作者名】

M a r i a

【あらすじ】

サボテンとエリーの愛しい二人暮らし。 サボテンが喋った!?

L o v e l y 1 . 素敵な贈り物。

「どうせ私なんて…可愛くないし、だめなんだよ。」

矢田エリー。

昔からこの名前が嫌いだった。

私に似合わないこんな可愛らしい名前なんて、いらないよ。

今日は雨。

うっん、予報じゃ曇りだった。

なのに外に出て歩き出したとたん急に降り出したんだ。

どうやら天気まで私に冷たい。

「別にいいけど…」

古びた黒い靴を見つめながら一人、つぶやいた。

8：45。

いつもと変わらない朝。

いつもと同じ風景。

もしもこの世界が月9のラブストーリーだったとしたら、私は脇役？
なんて良いものじゃない。

所詮、私なんてセリフの一言もないただのエキストラだ。

「ん？え…太陽？」

ふと傘を上げるとさっきまでの雨が降りやんでいて、グレーの雲の間から一筋の太陽の光りが射しこんでいた。

その光りが水たまりに反射してとってもきれいだ。

” Happy Birthday, Love for you . . . ”

可愛らしいお花屋さんらしき店頭にたくさん並んだ贈り物。

ピンクや水色、真っ赤なりボン…とおめかしして並んでいる。

「サボテン…？可愛いな。」

「ありがとう。」

「え…っ！？いま喋っ…」

まだ寝ぼけているのだろうか。
サボテンから話し声が…

「いらっしゃいませ。ごめんなさい、まだ開店前で…」

わっ！

綺麗な人。

「いいえ。あの、見てただけなので…何でもないです！」

私はそそくさと花屋をあとにして仕事場へと向かった。

12:30。

いつもと変わらないお昼休み。

いつもと同じ1時間休んでまた仕事に戻る。

朝、駅のコンビニでできとつに選んだおにぎりとお茶を片手にランチタイム。

それにしてもあんな場所に花屋さんなんてあつたっけ。全然知らなかった。いや、そもそも私はいつも下ばかり向いて歩いているから、はじめからあつたとしても、きつと絶対気付かない。

18:00。

「退勤、つと。」
パソコンに私の嫌いな名前と名前より大切な社員番号を打ち込んで会社を後にする。

大切な社員番号がなければ、会社では「私」ではない。

会社終わりはたいてい真っ直ぐに帰る。

だけどそのつもりの心とは逆に、私の足はあのお花屋さんへと寄り道をしていた。

あっ、朝の店員さんだ。

…って向こうは覚えていないだろうけど。

「いらっしやいませ！朝はごつも。お仕事帰りですか？お疲れさまです。」

キラキラ

心が一瞬ふわっと揺れた、そんな気がした。

「あの…あのサボテン、下さい！」

思わず口から飛び出した言葉に、自分でもとても驚いていた。

すると綺麗な店員さんは、優しい微笑みでサボテンを持ってきてくれた。

「リボン何色になさいますか？」

「え？」

「お誕生日だし赤とピンクかな、やっぱり。」

「はい。それじゃあその色で…」

もちろん今日は誰の誕生日でもない。
ただど何か買わなきゃって、このサボテンが欲しいって、なぜだか
そう思ったのだ。

可愛くラッピングされた贈り物を手に、店員さんはこんな素敵な言葉
をくれた。

「ハッピーバースデー。」

「ありがとうございます。」

お店を出た私の帰り道は、いつもと少しだけ違っていた。だって今日は私、笑って歩いている

次の日の朝。

「んっ、朝だ。起きるか…」

今日は日曜日。

私の休みは水曜日と日曜日の週休2日。

だけど休日の過ごし方といえば、たいていはお昼くらいまで寝て、掃除に洗濯をして、ちょっとパソコンでもいじっていたら終わってしまう。

何でもない一日だ。

「そんなのもつたいない！」

「ん…？え…何いまの？」

またあの声が聞こえた気がした。
また私、寝ぼけ…

「こつちだよ！こつこ！サ・ボ・テ・ン！」

それはまぎれもなく、出窓の上で可愛くおめかししているあのサボテンから聞こえてくる。

「…？まさかね。」

きつと夢でも見ている。
そう思うことにしよう。
もう一度ベッドにもぐり込んで…

「こら！起きろー！こつんなにいいお天気なのに！素敵な日曜日が

もったいないよ!！」

ガバツ!

「……!!!!サボテンが喋ってる……」

ツンツン。
……痛い。

「んふふ……くすぐったいよエリー　おはよう!！」

「おは、よう…っ。」

その日からサボテンと私の愛しき二人暮らしが始まった。

Love112・ラブリーサンデー。

サボテンの口ぐせ。

「エリー。女の子はね、誰でもみんなお姫様なんだよ。」

なわけないっす。

でも彼女は曲げない。
けっこう、いやかなりの頑固者。

「エリーだってお姫様なんだから」

「私なんてただの女の子だよ。」

「そつだよ。ただの女の子だからお姫様なの。」

彼女の名前は以下サボンとする。

「可愛いでしょ　そう呼んでね。」
と一日目からの彼女からのお願い。

サボンが家に来て初めての朝。

「いい？まず朝起きたらカーテンを思いっきり開く！そして朝日を
いっぱい浴びるの」

「なんで…？」

「エリー、想像してみてください。もしもあの太陽からとっても可愛くなれ
るキラキラが降り注いでいたらどうする？」

「…？」

「朝慌ただしくただ出掛けて行く人と、キラキラシャワーをいっっぱい浴びて出掛けて行った人、どっちが可愛くいられると思う?」

「…。」

首をかしげすぎて、倒れそうになってしまった。

「とにかく、ほら！カーテンを開けてキラキラシャワーを浴びてみて」

「いいよ私は…だいたいそんなので可愛くなれるんならみんなやっ
てるって…」

そう言っつてめんどくさがりながらも私はカーテンを開いた。

「ん…まぶしっ!」

わっあ、きれい!

日曜日の朝の太陽は、思っていたよりもキラキラしている。
青い空も晴れわたっていて、何かいい感じだ。

「さっ シャワーも浴びたことだし、エリー。私にもお水ちょうだ
い」

「え、ああ、うん。」

シュツ、シュツ！

「ん、気持ちいい！ありがとうエリー」

「。びびりたしまつて。」

太陽のキラキラシャワーを浴びたあと、私は何故か出掛けることになった。

「ねえ、サボテ：いやサボン。お休みっていうのは、何にもしない
で休むからお休みなわけで：だからさ、」

正直せつかくの日曜日は何もせずにだらだらと過ごしていたい。
でもサボンはかなりののがんこちゃんだ。

「だめだめだめ！今日はせつかくのお休みなんだよ。可愛く過ご
せる大チャンスの日だよ。とりあえずお気に入り洋服を着て、め
いっぱい可愛くしてお出掛けしておいでよ。きつとすごく楽しい
よ」

私はししぶ家を出た。

「それにしても本当にいい天気だね。」

日曜日に出掛けるなんて、（しかも何の予定もないのに。）本当に久しぶりだ。

あ、犬。

可愛い。犬まで可愛らしい洋服を着てる。いや着させられてるだけか。

あ、この庭に咲いてる花可愛いな。
なんていう花だろう。

あ、あの赤ちゃんあくびしてる。
パパも一緒につられてるし。
幸せそうだなあ。

「あっ！そうだ…私サボンからのメモ」

私は慌ててポケットの中に右手を入れてみた。

サボンは出掛ける前にいくつかメモするようにと行って話してくれ

た。
最っ高にラブリーな一日にするためにどれも必要なことらしい。

Lovely1・周りをよく観察して歩く。

(x下を向かないこと。)

とりあえず1は大丈夫そうだ。今のところ。

Lovely2・可愛いものを三つは買うこと。

(xただ見ている満足はだめだよ!)

でもどうせ私には似合わないし…ってきつとこれがダメなのだろう。

「いらっしやいませ。何かお探しですか?」

思わずお洒落そうな下着屋さんに入ってはみたものの…

耐えられないっ！

綺麗な店員さんが最高の微笑みで見つめてくる。

Lovely3 恥ずかしながら手をのばしてみる。

…よっっ！

「えっと…えっ…と、っっっっ可愛い感じのものが欲しいなっと思っっっっ」

「可愛い…のですか。」

ああ、一刻も早く帰りたい…。
恥ずかしすぎる…。
やっぱり見ているだけにすれば良かった…

すると店員さんが奥の方からピンク色の下着の上下セットを手を持ってきてくれた。

「お客様にはこちらなどがお似合いになるかと思えますよ」

「…いや、やっぱり私、」

Lovely4・たまには他人の意見に思いきって乗ってみる！

「…似合いますかね。」

「はい！お客様の白いお肌にぴったりだと思いますよ。ご試着してみますか？」

「は、はい…」

私…こういう可愛いものも似合うのかな。
何かちょっと嬉しいな

それからその後、に寄ったお店でバスケットとアロマランプも買って
みた。

両手に紙袋を持って歩くなんて…

何だかちよっとヒロインみたいだ。

お給料、普段使っていないなくなって良かった。

一生懸命働いたお金で自分へのご褒美を買う。

単純かもしれないけどすごく素敵なことなんだって、初めてそう思
った。

だって私、何かいまとっても楽しい

ガチャ

「ただいま〜！サボン、ただいまっ」

「おかえり、エリー 楽しかった？」

「うん！まあ…ね」

「よかった！」

帰って来てから眠りにつくまでの間ずっと、私はサボンに今日あったことをひたすら話していた。

おやすみの言葉と一緒にサボンは言った。

「最高にラブリーな日曜日になってよかったね。これで今夜は微笑みながら眠れるね」

「え？微笑みながら…?」

「うん！眠る瞬間は素敵なことを思い出して眠るの。そうしたら夜中優しい表情かおで眠れるから、必然的に朝も素敵な表情」

「なるほど…」

確か何かの記事で昔読んだことがある。
眠る時に嫌なことや難しいことを考えて眠ると、そのまま眉間にし
わや怖い顔になってしまったり。

私がよく無表情だとか覇気がないなんて言われる理由が少し理解つ
た気がした。

「エリー、おやすみなさい」

出窓のサボンに月の光りがあたって何だか少しロマンティック。

私はベッドに横になりサボンを見つめた。

「うん。おやすみ、サボン。」

そうして瞳を閉じてそっと眠りについた。
優しく微笑みながら…

L o v e l y 3 . 素敵なお昼休み。

キラキラキラキラ

「ん〜!」

カーテンを開いてキラキラシャワーを浴びる。
月曜日の朝もまぶし…

…くはない。
だって今日は雨だ。

そうだった。

天気は私に冷たいのだった。

そんな私にサボンが言葉をかけてきた。

「雨なんて…何だかドラマティックで素敵っ！」

思わず笑ってしまふ。

都合が良すぎて何かとつてもおかしいもん。

するとサボンは続けた。

「エリー。女の子はみんなお姫様なんだよ？ヒロインなんだよ？すべては主役を輝かせるためのキラキラの”かけら”なんだから。」

…確かに。

言われてみれば甘いラブストーリーに雨はいつも欠かせない。

「ねえ、エリー？今日は早起きして時間があるしお弁当でも作って行けば？」

ベッドの横の時計に目をやってびっくりした。
だってまだ目覚ましが鳴る前。
いつもより30分以上も早く起きてしまったようだ。

再びベッドにもぐりこみながら私はサボンに向かってつぶやいた。

「ラッキー もうちょっと眠れる…痛っ」

信じられない！
飛んできたものはサボンのトゲだった。

「分かったよ…はぁ。」

しびしびベッドから起き上がってキッチンへと向かう。

「お弁当なんて作ったことないよ…何か入れられるものあったかな
」？」

一人暮らしの冷蔵庫なんて男子も女子もきつと変わらない。
閑散としているもの。

「とりあえず卵焼きと野菜炒めでいっか。ご飯はチンして…」

いつもよりも早く起きたはずが何だかお弁当のおかげでバタバタだ。

8:45。

いつもと変わらない朝。

いつもと同じ風景。

ただ一つちがうのは、私。

実はきのう買ったばかりのあの可愛い下着をつけてみたのだ。
全然見えない洋服の下のものでこんなに気分が変わるなんて思っ
てもみなかった。

サボンじゃないけど何だかとってもお姫様になったような気分！

「あ…っ」

あの可愛いお花屋さん。

あの綺麗なお姉さんが今朝も準備をしている。

「おはようございます。今日もお仕事がんばってくださいね。いつ
していいですか。」

「ありがとうございます。…いいってききます…」

キラキラキラキラ

あ、まただ。
心が一瞬ふわっと揺れた。

12:30。

いつもと変わらないお昼休み。
いつもと同じ1時間休んで…

「あれ〜？矢田ちゃん今日お弁当なんだ？めずらしいね〜！」

同期の子が話しかけてきた。

彼女はとても可愛くて、私なんかとは別の部類だと思っていたから、新人研修以来ほぼ初めてかもしれない会話に何だかどぎまぎしてしまう。

「よかったらお昼一緒に食べよ？」

そうして屋上の室内テラスへやって来た。

本当は屋上の外にもテラスがあるのだけど、未だあいにくの雨降り。

「豊田さんはいつもお弁当なんだね。すごいね。」

「そんなことないよ。ただエロしてるだけだよ。」

豊田さんはそう微笑みながらお弁当のふたを開いた。

「わっ！可愛いね！もしかしてぜんぶ手作り？」

思わず身を乗り出してしまった。

恥ずかしい…！

こんなに可愛いお弁当箱の前で、私こんなを開くなんてさらにもっ

と恥ずかしい…！！！！

「卵焼き上手だね。野菜炒め、私も好き〜！」

心まで可愛い女の子だ。

私は卵焼きを一口で頬ばった。

「卵焼きだけはなぜか昔から得意だったんだよね。でも全然、豊田さんみたいな可愛いお弁当じゃなくて恥ずかしい…っ！」

すると彼女はプチトマトを私のお弁当箱の中にちょこんとのせた。

「…？」

可愛すぎる天使の微笑み！

「たった一つ、こつやって色をいれるだけで華やかにならない？」

…確かに。

私のこんなまるで男子弁当でさえちょっとだけ可愛らしい。

「お弁当も女の子もきつと一緒にだよ ほんのちよつとの何かで変わると思うんだ！」

”ほんのちよつとの何かで変わる”

お昼休みの終わりを告げるベルが鳴り響く。

豊田さんはお弁当箱を袋にしまいながら微笑んだ。

「豊田さん、じゃなくて歩あゆでいいよ！今度家にあるお弁当の本持もつて来るね それじゃあ午後も仕事がんばろっ！」

心が一瞬ふわっと揺れる。

「うん！ありがとうございます…歩ちゃん」

こんなに素敵なお昼休みは入社以来初めてだった。
午後も頑張れそう！

Love1y4・眠りにつくその前に。」

「エリー！お風呂のお湯そろそろいいんじゃない〜?!」

サボンの声に八つとした。

キュッ、キュッ！

「…セーフ!」

って間に合ったはいいものの、私の心がまだ間に合わない。

出窓の上からサボンの声が降りてくる。

「お〜い！いつまでそうしてるの？せっかくの温かいお風呂が冷め
ちやうよ！〜！」

「分かってるよ〜。う〜ん…でもどうしてもめんどくさいんだも〜
ん。やっぱりシャワーだけにしておけばよかつ…痛　っ、もう！サ
ボン〜！」

サボンのトゲは可愛らしい見た目よりもずつと痛い。

サボンはちょっと厳しく説教風に語ってくる。

「いい？その日の疲れや嫌なことはお風呂で一緒に洗い流すの。そうして心も体もぼかぼかになって眠りにつくの。」

分かってはいるけれど、どうにもやっぱりめんどうさい。

そんな私に説教は続く。

「エリー？めんどくさいんじゃないやなくて自分へのご褒美だって思ってみたらどう？そう思ったらとっても素敵な時間になりそうじゃない？」

自分へのご褒美…？
ご褒美…か。

今日も一日仕事をがんばった私へのご褒美。
贅沢なバスタイム？

日曜日に買ってみたバスセットを手に、お風呂場へと向かった。

「おゝ。花だ！」
フラワーバスソルトを
注ぎ入れた。

”湖の上に可愛いお花が咲いている”
サボン風に言うならば…？

とびっきり甘いフラワーブーケの香りに包まれながら、私は贅沢なバスタイムを楽しんだ。

「今日も一日お疲れさま。ありがとう。」
サボン風に言うならば…？

「何々か本当にお姫様みたい」

甘く温かい空間に、心も体もほっとほぐれていく

お風呂からあがってボディミルクを足にぬってみた。
優しく抱きしめるように…

「そっだ、エリー！眠りにつく前に素敵な言葉を口にしてから眠るのもおすすめだよ。」

ボディミルクのふたを閉めながら、私はサボンの話に耳をかたむけた。

「素敵な言葉？たとえば何だろう？」

「好きな人の言葉とかお気に入りの言葉とか何でもいいんだよ」

そういえば昔買って放置したままにしていた雑誌に…

「あつたあつた！この言葉すごく素敵だな〜って思ったんだ」

「どんな言葉なの〜？」

” If you want to keep your lips
beautiful, you should use beau-
tiful words.
If you want to keep your eyes
beautiful, you should find othe-
r's excellences. Audrey Hepburn

”n

「もしも美しい唇になりたいのなら、美しい言葉を使ってみて。もしも美しい瞳に憧れるのなら、他の人の素敵などころを見つけるの。」

その口にしてみたら何だかとても素敵な気分に包まれた。

出窓の上からサボンが静かにささやく。

「とっても素敵だね エリー、おやすみ。」

「そうだね おやすみなさい、サボン。」

L o v e l y 5 . 素敵な靴に連れられて。

恋する理由って何だろう？

お昼休みに屋上の外テラスに腰掛けて、そんなことを想いながら空を仰いだ。

クリスマス限定のジンジャーチャイラテを右手に。

「グッドアフタヌーン、エリー　もしかしてたそがれ中？」

「歩っ！びっくりした〜。」

歩も同じお店のクリスマス限定、ホワイトラズベリーラテを手にし

ている。

「あゝ 私迷ってこっちにしたんだあ！そっち美味しい？」

歩は私のとなりに腰をおろした。

「一口飲んでもいいよ。」

クリスマス色のカップを手に歩は幸せそうに微笑んでいる。
まるで真冬のCMみたいだ。

そんな幸せそうな歩に私は問いかけてみることにした。

「ねえ…歩。恋する理由って何なんだろう？何だと思っ？」

真剣過ぎる私の想いが伝わったのか、歩は真っ直ぐに私を見つめ返した。

「うん…難しいね。何なんだろう？」

「…やっぱり分からないよね？」

歩は急に私の腕をつかんでキラキラした瞳で問いかけてくる。

「エリー、もしかして好きな人でも出来た？恋してるのかい？」

思わずチャイラテを口からこぼしてしまいそうになった。

「そっついっんじゃないよー！そっついっのじゃなくて、本当に。」

「ふん。まあいいけど、でも迷った時には一つ方法があるよ。知りたい？」

突然の歩のラブリークイズに釘付けになってしまふ。

「…とっても知りたいっ！」

今度は私が歩の腕をつかんでキラキラした瞳でせがんでいた。

「それはねっ…」

18:00。

「退勤、つと。」

仕事の帰りに寄り道をするなんて、ちょっと前の私では考えられなかった。

会社の駅の近くにあるデパート。
ガラスのケースの中には素敵な靴が飾られている。

ベリー色の、りぼんの付いた可愛いパンプス。
黄金の7センチヒール。

ずっと憧れていたけど、いつも見つめているだけだった。
だけどついに…

「買ったかった…」

靴の箱の入った大きな袋を肩から掛けて、私は足早に家へと帰った。

「おかえり、エリー」

「ただいま、サボン〜！」

今日考えたこと、歩と話したこと、ずっと憧れていた靴をゲットし

たこと、いろいろなことをサボンに話した。

” 素敵な靴をはくと素敵な場所へ連れて行ってくれる ”

今日のお昼休みに歩が教えてくれたラブリークイズの答えだ。

「うんうん。とっても素敵じゃない！その靴エリーにすごく似合ってるよ。素敵なその靴がエリーを素敵な場所へ連れて行ってくれるといいね！」

サボンの言葉に胸が弾んだ。

明日は水曜日。

お休みだしこの靴を履いてどこかに出掛けてみることにしよう。

そうだ！

久しぶりに映画でも観に行ってみようかな。

水曜日の朝。

キラキラシャワーをたっぷり浴びて、とびっきりのお洒落をして家を出た。

お気に入りのベリー色の靴と一緒にね

それにしても映画館に来るなんて久々過ぎてきよるきよるしてしま
う。

人多いな…
平日なのに。

「…矢田さん？」

映画館の人ごみの中から少し低い声が聞こえてきた。
いま誰か私の名前を呼んだ…？

「やっぱり！矢田さんだ。横顔が何か似てるなって思ってた。」

振り向いた先に立っていたのは、同じ会社の平山さんだった。
私より4年先輩の平山新さん。ひらやまあらた

「平山さん！びっくりです。平山さんも映画観に来たんですか？」

「うん、そうだよ。僕もびっくり！」

こんな偶然あるものなんだなあ。
いや、きつとサボンや歩なら…
偶然じゃない！
必然…いや運命…！なんてキラキラするのだろうか。

平山さんは社内でも少し有名で隠れファンもいたりする。少しくせつ毛の黒い髪にあごに生やしたひげはいやらしくなくてちよっぴりセクシー、ダークグレーのスーツを格好良く着こなしてしまう素敵男子だ。

初めて私服を見たけどこっちの平山さんもとっても素敵だなあ。

「もしかして矢田さんが観るのって”素敵な靴に連れられて”だったりする?」

平山さんはさっき買ったであろうチケットを見つめながら微笑っている。

「…はいっ…そうです。もしかして平山さんも?」

「はい…そうです(笑)」

「それはね…素敵な靴をはくことだよ」

「素敵な靴？」

「うん」
”素敵な靴をはくと素敵な場所へ連れて行ってくれる”
ん

だつてさ！だからお気に入りの靴を履いて出掛けてみたらきつと、
” 素敵な何か ” が見つかるかもしれないよ！ ”

L o v e l y 6 . 恋する理由。

恋する理由って何だろう。

今日も屋上の外テラスでたそがれ中。

今日はこの間歩が持っていた、ホワイトラズベリーラテの方をお供に。

クリスマス限定の柄が暖かくって可愛い。

「…矢田さん？もしかしてたそがれ中？」

歩…じゃない！

平山さんだ…っ！

私は慌てて襟元や髪の毛を直した。
良くなっているかは別として。

「お疲れさまです！もしかして何回か呼びました…：か？」

「うん、3回くらいかな？でも良かった！もしかして嫌われてるのかと…：（笑）」

平山さんは少し下を向きながら微笑んでいる。
彼の癖だ。

そんな彼の素敵な癖に女の子はみんな恋している。

「全然っ！そんなそんな！嫌ってなんてないです！ただ考えごとしていて…それで…っ」

慌てる私に優しく微笑みながら、平山さんはとなりに腰掛けた。

「ありがとう。ごめんね？考えごとの邪魔しちゃったかな。」

あ、まただ。

素敵な癖。

その素敵な癖に女の子はみんな…

「…平山ちゃんね」

「うん？」

「平山さんは…恋する理由って何だと思えますか？」

私は右隣りにいる平山さんを真っ直ぐに見つめた。

「恋する理由？」

「実は最近ずっとそのことについて考えているんです。でもとって
も難しくって……」

「恋する理由か……」

平山さんはそう言ったあと、右手を少し傾けてコーヒーを口にした。

クリスマス限定…
ではなく定番カラーのもの。

「それは難しいテーマだね。うーん…矢田部長！次回のMTまでに資料を集めてまとめておきます。」

少しおどけた平山さんは何だかどびっきり可愛がしい。

「よろしくお願いします。」

そのあと少し話をしてお互い午後の仕事へと戻った。

その日の夜。

「エリー？携帯光ってるよ！電話かメールじゃない？」

ちよつどお風呂からあがってボディミルクをぬり終わったところ。

「誰だろ…？」

携帯画面に流れる文字にドキッとして思わずベッドに落としてしまった。

「誰からだったの？」

件名：MTの件について

本文：お疲れさまです！

今日話していたMTの件ですが、食事も兼ねて明日の仕事の後どうですか？

もし良かったら返信待っています。

平山

「MT…」

しばらくの間、ぼーっとしたまま携帯画面を見つめていた。

するとサボンは言った。

「それってもしかしてデートじゃない？うん…デートのお誘いだよ

「！きゅっ」

デ、デ、デート！！！？？？

この私がまさか平山さんに、まさかデートに誘われるなんて…
クレイジーだ。

私は携帯電話を枕の下に隠した。

「何してるの？ヘリー？」

私も布団に包まって隠れてみる。

「いい。行かない。あとで断るメールする。うん。そうするもん！」

は〜あ…。

サボンは大きなため息をついた。
わざとらしく〜く。

「どっつして断るの？断る理由がどこにあるの？行って来なよ！」

はあ…。

私もわざとらしく大きなため息をついてみせた。

「断る理由なんてないよ。でもデートする理由もないもん。」

サボンは少しの間黙ってから話し出した。

「エリー？それって”恋する理由”と一緒になんじゃない？」

「…え？」

「恋する理由もデートする理由も分からないけど…ううん！分からないからこそ、みんなしてみろんだと思うの。だってそうでしょ？恋する理由なんて分からなくても、”恋しない理由”なんてきつとどこにもないんだもの！ねっ”」

サボンの言葉に不思議と深くうなづいていた。

私は布団に包まるのをやめて、枕を持ち上げた。

うんうんうん。

「送信、つと、」

「何て送ったの？教えて、エリー、」

件名：MTの件。

本文：お疲れさまです。

MT兼お食事について了解しました。
明日楽しみにしています。

矢田

「内緒、」

「えっ！エリーのいじわるっ！」

何だかとっても胸がドキドキする。
こんなに甘くて素敵な夜は久しぶりだ。

Love1y7 . 素敵な金曜日の夜？。

「おはよう、ヘリー！」

金曜日の朝。

うっわ、デートの朝。

「お、おはよう…？」

だめだ…。

緊張し過ぎてきこちなくなってしまう。

今からこんなじゃきつと一日もたないよ…。

そんな壊れかけたロボットみたいな私に、サボンは素敵な秘密を教えてください。

「エリー？金曜日はね、女性がみんなヴィーナスになれる日なんだよ。」

「ヴィーナス？私も…なれるのかな？」

「もちろん！さあ、とびっきりのお洒落をしてデートに出掛けておいで。」行ってらっしゃい、エリー！

「…うん！行って来ます、サボン。」

デートの洋服はワンピースを選んだ。
足元にはお気に入りの素敵な靴を連れて。

「ただど変じゃないかな…。
私なんかこんな格好しても大丈夫なのかな。」

そんなことを思いながら駅から会社までの道を歩いていると、後ろの方から声を掛けられた。

「おはようございます、矢田部長。」

「平山さん…っ！」

振り返ると朝から優しい微笑みの彼が立っていた。

「今日すっごくいい天気だよね！」

「そ、そうですね…っ！」

オー、マイ、ロボット。

これから早朝会議があるらしい。
平山さんは去り際に…

「何かいつもと雰囲気違って…素敵だね。じゃあ…また夜に！」

ああ。

後ろ姿まで格好良い。

素敵なのはまちがいでなく、私ではなくてあなたです。

「…」素敵だね。また夜に！
「…」って何何！？今のってもしかして
「…」

「歩っ！な、何でもないよ！ほ、本当に…」

歩はにこにこしながら私の左腕に右腕をからめてくる。

「君は本当に嘘をつくのが下手っぴだね　可愛いなあ〜！エリーちゃんは」

私は耳まで真っ赤になりながらそっぽを向いた。

歩とは今日のお昼を一緒に食べる約束をした。

「たっぷり、事情聴取、させてもらっつよ、」

お昼休み。

屋上の外テラスの席で歩と二人、ランチタイム中。

私の作った卵焼きを頬ばりながら歩が私をからかってくる。

「まずはじめに……平山さんはいま会議中だからここには来ないよ！」

「えっ？別に私はそんな…っ」

「さっきからテラスのドアの方、ず〜っと気にしてるみたいだったからさ！」

天使の微笑みが今日は何だか小悪魔の微笑みに見える…！

「んん…っ。」

私は咳払いをしてみせた。

歩は相変わらずにここにこししながら私を見つめている。

お昼休みの間ひたすら”事情聴取”というガールズトークが続いて、あっという間にベルが鳴り渡る。

お弁当箱を片付けながら歩は言った。

「恋のいいところは階段を上る足音だけで、あの人だってわかることだわ」

私もお弁当箱を袋にしまいながら答えた。

「ん？何それ？」

歩は微笑んでいる。

「ガブリエル・コレットだよ フランスの女性作家さん。」

「うん…？」

あ。

いつもの天使の微笑み！

「恋をしたんだね、エリー！素敵な恋になりますように、」

歩。

最高に可愛らしい天使の微笑みだ。

「…ありがとう！」

テラスルームのドアを出る瞬間、歩はそっと耳打ちをした。

「帰りに渡したいものがあるの！今夜のデートの待ち合わせの前に使ってみてね。」とっておきの秘密”だよ”」

18:00。

「退勤、つと。」

いつもとはまったく別の帰り際。

いつもとは全然ちがう気分。

だって私、これから平山さんとデートだもん！

待ち合わせ場所に行く前にパウダールームに入って、香水をふりかけた。

歩が渡してくれた”とっておきの甘〜い秘密”。

「…よしっ！」

スーツ姿は会社で見慣れているはずなのに、街中に立っている平山

さんは最高に素敵で、思わず…っ！

「っわ…っ！」

「…っ！と！ずいぶんドラマチックな登場だね（笑）！大丈夫？」

足が”ぐにゃっ”て、
平山さんの胸に”ドンッ”て、
恥ずかしすぎて泣きそう…。

「ごめんなさい…大丈夫ですっ。本当にすみません！」

平山さんは相変わらず素敵なお微笑みで、私は相変わらず変なおロボット。
」。

にこっとながら平山さんは前を向いた。

「じゃあ…行こっか！」

「はい…行きませう。」

L o v e l y 8 ・素敵な金曜日の夜？

「この間の映画、”素敵な靴に連れられて”おもしろかったよね。」

「

会話をしながらも平山さんはささっとサラダを取り分けてくれる。

「あっ、ありがとうございます！とってもおもしろかったですよね。」

「

…サラダがのどをとらないっ！
慌ててお酒で流しこむ。

「でもちよつと意外です。平山さんがああいう映画観に行くなんて……」

「確かにそうかもね！実はさ……会社の子たちが話してるのを聞いたんだ。最高だったってさ。」

平山さんの顔がほんの少くしだけ赤くなった、気がした。

「でも観に行つて良かったよ！光栄にも矢田部長に会えたので。」

「も〜！からかわないでくださいよ〜。」

今度は私の顔が赤くなっている。
気のせいではなくて、確実に。

金曜日の夜のせいか店内にはお客さんがいっぱい、こごういう雰囲気のお店のせいか店内には恋人風なお客さんでたくさん溢れている。

私たちももしかして…

そんな風に見えているのだろうか。

そんなことを考えていたら余計に熱くなってきてしまった。

「矢田さん？大丈夫？」

「あ…っ、だ、大丈夫です！んん…っ。」

呼吸をととのえて、食事の再開だ。

それにしてもこのお店は雰囲気も素敵だし、出てくるお料理やお酒もどれもとっても美味しい！

チキンソテーを食べながらつついっつい口元がゆるんでしまっ。

「ふふ。美味しい？」

「はい！とっても！幸せです。」

「そっかそっか。良かった。」

あ、いつもの癖。

「…？どうかした？」

「いや…その、平山さん、少し下を向いて微笑むのって癖ですよね。」

「…え！？そうかな…？」

「はい、そうです…よく覚えてます。」

「そっか。変…かな？」

平山さんは黒ビールにそつと口づけた。
その感じが妙にセクシーでたまらない。

「変じゃないです！変…じゃなくてむしろその、素敵…です。」

ああ。

私って図々しく何を言っているのだろう。
恥ずかしい…。

「…？平山さん？」

ふと顔を上げると平山さんの頬が少しだけ赤くなっている。
気のせいではなくて今度は本当に赤い。

「んん…っ。えーっ…ありがとう。ん…あ、何か飲む？」

平山さんて…

何だかやっぱりとびっきり素敵で可愛い人！

それをきっかけに私の緊張もほぐれたのか、少しは人間らしい、
”デート”を楽しむことができた。

4杯目のビールが運ばれてきて、平山さんは素敵な話をしてくれた。

「一番忙しい人間が、一番たくさんさんの時間を持つてるんだ。」

「一番忙しいの？」

「そう。なぜなら忙しい人たちっていうのは、それだけやらなければならぬことを抱えているから、その分有効的に時間を活用しているんだ。」

「なるほど…それじゃあ反対に暇な人っていうのは…」

「そう！一見してそういう人たちが時間を取らさん持っているように見えるんだけど、実はうまく活用出来ていない。彼らは単に時間を持て余してしまってるんだよ。」

「なるほど。何だかとても深いですね。平山さんの持論ですか？」

素敵です！」

「いや！アメリカの心理学者だったかな？」

そう言って子どものように笑う平山さんは可愛くてたまらない。

気がついたら時計の針はもう9時半を回っていた。
びっくりだ！

「そろそろ行こっか。送ってくよ。」

「ありがとうございます。」

シャラララララ

お店のドアを出る瞬間、とっても素敵な音がした。
まるで私の心の中の恋するベルの音が聞こえてしまったのかと思う
くらい！

帰り道。

平山さんはさりげなく車道側を歩いてくれている。
歩く速度も私に合わせてゆっくりと。

「その靴…」

「え…?」

「その靴すごく素敵だね！あの映画の日も確か履いてたよね？」

嬉しい！

私の足元に気が付いてくれるなんて。

「実はあの映画の日が初めてこの靴で出掛けた日だったんです。」

「そうなんだ。とっても似合ってるよ!」

「嬉しいです。ありがとうございますっ!...」

ベリー色の靴はより一層、ピンク色に染まっっていく。
私の頬のように。

「...また誘ってもいいかな?今度は部長としてじゃなくて、
矢田エリーさんとして。」

ズッキュン!

ヴィーナスなはずなのにがっしり射止められてしまいました。

「はい…っ！もちろんです！ありがとうございますっ！まっすっ。」

ああ。

なんて…

なんて素敵な金曜日の夜なのだろう。

L o v e l y 9 . 幸せなランチタイム。

「ん〜！素敵な朝だよ〜サボンっ！おはよう」

開いたカーテンからキラキラのベールがこぼれ入ってくる。

「おはよう 朝からずいぶんご機嫌だね〜、エリー。」

「そんなことないよ〜！も〜サボン」

いや。

世界中のどこからどう見ても今朝の私はご機嫌上々だ。

朝会社へ向かう足どりもるるんで、もしかしたらこのまま空を飛んでしまえるんじゃないかな！

「なぐんてね」

「なぐに一人でここにこしてるのかなぐ？エリーさん」

「歩っ！おはよ」

「おはよう 早く素敵な金曜日の話聞かせて聞かせて〜！」

二人できゃっ、きゃっ言いながら歩道を歩く。
何だか女子高生みたいな気分！

「あーおはようございます。平山さん。」

「え…！？」

歩の言葉に驚いて振り向くと…

「おはよう！朝から女の子は元気だね。」

「平山さんっ！おはようございますっ！」

朝から出会えるなんて幸せだなあ。

「おはよう、矢田さん。じゃあお二人さん、ガールズトークに花咲かせ過ぎて遅刻しないように、ね！」

平山さんはそう告げると颯爽と歩いて行ってしまった。

「さすが微笑みの貴公子だね。朝から爽やか〜！」

歩は、ねっ　とにこにこしながら私の方を向いた。

今日も一日、仕事がんばろうっと。

お昼休み。

歩は今日は急な仕事で忙しいみたい。
私は一人屋上のテラスへとやって来た。

ベンチに座り作ってきたお弁当を開く。
初めて歩とランチをした時から確実に進歩している私のお弁当の中
身。

今日はなかなか可愛らしく出来上がった。

お弁当作りのいいところって、決してエコなだけじゃなくって、朝
の時間を有効的に使えること。

平山さんの教えてくれた忙しい人の時間の話じゃないけど、私は今
まで時間のない忙しい朝にお弁当作りなんてもったいないと思って
いたのだ。

だけど実際に毎朝作ってみて思ったことは、朝の時間がいっぱい、必然的にできることもたくさん！

余裕を持って起きるからメイクや洋服選びにもたっぷり時間を使えるし、可愛いお弁当もこうして作れるし、何だか朝からとっても素敵！

「いったんいただきます」

プチトマトを口に入れようとしたその瞬間…

「待てっ！」

「…っ！平山さんっ！」

「あははっ！…じゅめん、じゅめん。どしどしゆっくうさじ上がね。」

恥ずかしい…！

大きく口を開けたところを真っ正面から見られてしまった。

平山さんは私のとなりを指差して”ここ、いい？”という風な仕草をしてみせた。

「…っ、どしっ！」

私はランチ用の袋を反対側にどかせて席を空けた。

平山さんはコンビニで買ってきたパンとコーヒーの入った袋を膝の上に乗せた。

でもなぜか真っ直ぐに前を向いたまま食べようとはしない。

「……………」

「あの…よかったらお弁当いっぱん食べますか？」

まるで嬉しそうにしゃぼを振る子犬のように、くるっとこっちを向く平山さん。

「いいの！？いや〜美味しそうだね〜って思ってたんだよね」

「ふふ どうぞ。味は自信ないですけど…たくさん食べてください
」

卵焼きを頬張りながらも微笑んでいる。
さすが貴公子？

「ん…美味しいね！俺出し巻き大好きなんだよね。…んまっ
」

「ふふ。幸せそうですね。よかったですっちなもどっぞ。」

私は水筒を差しだした。

「ありがとう。お茶？」

ふたを開けてカップ代わりに注ぐ。

「いえ、スープです。なんちゃってポトフ？みたいな。体が温まりますよ」

「最高だね、矢田さん！いや〜幸せだなあ。」

こっちのセリフです。
平山さん。

こんなに幸せなランチタイムってあるのだろうか。
まるで夢の世界！

ペロロロ〜

平山さんは携帯画面を見つめた。

画面の上でなめらかに動く平山さんの指に思わず見とれてしまう。

「姪っ子がさ海外旅行に行くらしくてさ。」

画面を見つめたまま平山さんは私に話しかけてくる。

「姪っ子さん？」

「うん…それで」の子…しばらく俺の家で預かることになったんだ。」

そう言って平山さんは子犬の写真を見せてくれた。

「可愛いですね〜！トイプードルですか？小さいぬいぐるみみたい」

「うん。まだわりと赤ちゃんみたい。まあ一週間だけなんだけどね」

それから平山さんは家族について少し話してくれた。

「うちの兄弟ってちょっと年が離れててさ。兄貴がいま38歳なんだ。だから姪っ子との年の方が近いの。」

「へへえ！」

嬉しすぎて身を乗りだして聞き入ってしまう。
平山さんもどことなく嬉しそうに話をしてくれているような気がする。

「姪はまだ20歳なんだけど、婚前旅行だって兄貴が切なそうに電話でばやいてたよ。」

「姪っ子さん結婚するんですか!?!」

ポトフを飲みながら平山さんはいつもみたいに下を向いて微笑んだ。

「どうなんだろうね? まあ、まだ若いから分からないけど、彼は年上でなかなか素敵なお人みたいだから兄貴たちも心配はしてないらしい。」

「なるほど。楽しい旅行になるといいですよね! あ、わんちゃんの名前って何ていうんですか?」

「”トイ”だってさ。姪いわくおもちゃ箱みたいなキラキラするイ

メージでつけたらしいけど、彼には単にトイプードルの頭を取っただけだって言われるってぶつぶつ電話越しに話してたよ。」

話しに夢中になっていたらお昼休みの終わりを告げるベルが鳴り響く。

平山さんは水筒のふたを閉めながら私の方を見つめた。

128

「明日トイの散歩行こうかと思ってるんだけど良かったら矢田さんも一緒にどう?」

「行きたいですっ!でも明日、休日出勤なんです…」

「そうなんだ。残念だなあ。」

「本当に残念です…。」

せっかくのデートのお誘いだったのに。

「また誘つよ。とりあえず午後もお互い頑張ろう!」

「…はい。それじゃあまた。」

L o v e l y 1 0 ・ 甘〜い日曜日？。

「そんな顔しないの〜元気だして！エリー、ほらっ、にこっとなごしてみて」

サボンに言われて鏡に向かってにこっとなごしてみよう。
だけでもう一人の私は苦笑いだ。

コートを羽織りながら仕事へ向かう準備をする。

「エリー？口角だけはせめてあげるように心がけてみてね。」

「…はい。行ってきます〜。」

今日は日曜日。
だけど私は休日出勤。

せっかく平山さんとトイとお散歩デート出来たかもしれないのに…

そんなことを考えながら会社に着いた。
自分のデスクに鞆を置き、パソコンの電源を入れて、私はため息をついた。

「矢く田さんっ！おはようございますっ！」

ドアの方から新入社員の衛門福人君が、元気よく入って来た。

「福人君…！福人君も休日出勤？めずらしいね。」

私は無理やり口角をあげて微笑んでみせた。

「そっなんすよ！矢田さんですか？お互い大変っすね。」

「うん…。でもまあ、がんばろっね！」

「はい！」

…よし！

私も気持ちを切り替えてがんばらないとっ。

それからお昼過ぎまでひたすらパソコンに向かって仕事をこなしていた。

福人君が声を掛けてくれるまでずっと、飲み物すら一口も飲まずに…

「ありがとうー！ごちそうさま」

福人君がお茶を持って来てくれた。

そうして休憩がてらお昼ご飯にすることになった。

「矢田さんの弁当上手そうっすね。やっぱり料理出来る女の人は最高です！」

「ありがとう。」

福人君はいつつも元気ハツラツ！って感じで、話しているとこっちまで笑顔になってくる。

「矢田さんてあれですよね。何か口角？きゅっとあがってて、その何ていうか…何か、可愛いです！」

可愛い…？

私、いま、可愛いって言われた？
聞きまちがい？じゃないよね…

福人君はちょっと照れくさそうに頭をポリポリしている。

「…じゃあ俺、仕事戻りますっ！じゃあ失礼します！」

「うん…お茶！ありがとうね。」

そうして福人君はあっという間に走って行ってしまった。

それから夕方まで仕事をして、退勤作業を済ませてからパソコンの電源を切った。

福人君はこれから大学時代の友だちとご飯に行くらしく、元氣よく走って帰って行った。

私も”デート”したかったなあ…
平山さんに会いたかったなあ…

そんなことを想いながら携帯画面を見つめていたら、突然キラキラと輝きだした…！

平山さんだ…っ！
しかも電話…っ！

「…も、もしもしっ！」

電話の向こう側から少し低くて温かい、優しい声が響いてくる。

「矢田さん？もう仕事終わったかな？お疲れ様。」

「はい！今ちょうど終わったところで…お疲れさまです。」

ああ。

声が聞けただけでも幸せだ。

「そっか。あのさもし良かったら今から会わない？何か予定あったりするかな？」

そんなのあるわけないです…！

「…会いたいです！」

大きい声の自分にはっとして急に恥ずかしくなる。
平山さんも少し驚いているようだった。

しばらく沈黙が続いた後…

「良かった！じゃあ今から迎えに行くね。待っててね。」

まるで月9のラブストーリーみたい！

「はい！待ってます！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372y/>

愛しのエリー。

2011年11月10日02時37分発行